博物館学雑誌第10巻第1号・第2号合併号（通巻12号）67～76ページ1985年3月

自然科学系博物館の学芸員
―特にその研究活動について―

Research Activities of Curators of Science Museum.

布　村　　昇*
Noboru NUNOMURA

Abstract

In order to make better services for citizens and strengthen bases of all the museum activities, curators must study eagerly. The subjects which curators will pursue should not be restricted as much as possible, but the curators of natural history museums had better choose subjects on their local places and choose historical subjects, representing by a quaternary research. The curators of science and technology museums also make a professional study , especially on their local phenomena.

The conditions and environments for research are much ignored in Japan but there seems to be many facts and elements to be improved.

今日，全国的に大小様々の博物館が建設されており，博物館の数は急速に増えてきた。地方文化の興隆は確かにすばらしいことである。しっかりした理念を持ち，地道な活動をしている館も多い。反面，多くの館において，入館者数は減少し，館活動自体もややもするとマンネリ化したり，活力が落ちていることもある。そうでなくても，今後，博物館は，漫然としていて，新しい企画もせず，しっかりした研究も行わず，地域住民とのコミュニケーションをおろそかにした場合，入館者数も減り，館の活力も衰退するであろう。また，博物館の活動もやゝもすると目先のことだけを考えていることが多いが，このような時こそ，十年先，百年先，いや千年先の発展の見通しを考えるべきでなかろうか。

もちろん，職員の増員，予算の増大，入館者の増加など重要な問題が山積しているが，ここではその中で，特に学芸員の諸活動，とりわけ，研究活動のあり方について考えてみたい。しかし，私は地方の自然科学系（自然史系と理工系）での乏しい経験しかないので，これらの分野に限って論をすすめていきたい。

博物館のサービスと学芸員

博物館は，それが，地方にあり，特に市町村立である場合，市民の博物館に対する評価はたいへん重要である。市民からの支持を失った博物館は，ますます独りよがりの方針を出したり，予算や人員の面でも，後退し，館全体が，衰退の一途を辿るからである。

＊ぬのむらのぼる
富山市科学文化センター

市民の評価を決定する大きな要因は博物館員のサービスにある。例えば受付係の与える印象は特に重大で入館者のその館に対するイメージを決定づけてしまう。どんなに立派な展示室があっても，館員の中に不親切な態度や官僚的な言動が少しでも見られると，その館に対するイメージは絶対に良くならない。反面，展示にたとえ不満が残っても，館の職員のさわやかな笑顔があれば，全体としてかなり良好なものになることは当然である。このことは当然，博物館の全職員にあてはまる。館長であれ，事務職員であれ，技術職員であれ，学芸員であれ全く同じことである。学芸員は専門的内容で接客する事はもちろん，水のみやトイレの位置を聞かれる場合でもこのことは大切なことである。特に，入館者からの質問や電話などがあった場合，迅速に対応することが必要である。もしできるなら会議があったり，緊急な仕事を命ぜられた時であっても，まず，応待に出るくらいの親切さで対処する事が望ましいが，実際にはなかなかそのようにはいかない。また担当者不在の時にもまわりの者ができるだけカバーして一次対応をして質問者に答えなくてはいけない。

ただ，学芸員の場合，接客の態度やテクニック以上に本質的に大切なことは専門分野における，深く広く正確な学問的素養である。例えば質問を受けて，誤まった回答をしたり，いい加減な回答で，ごま化したりしては信用を失遂してしまう。回答の内容はわかりやすいと同時に学問的に正確でなくてはいけない。そして質問者の意図や状況を適確に判断して，その人の要求や理解程度にあわせた回答をしなくてはならないのである。

また質問のみならず，展示や各種教育事業や収集・保管事業についても，学問的に正確でかつ魅力的であることが，信頼につながることはいうまでもない。展示や教育については学校教育のようにカリキュラムや指導要領が決められている訳ではなく，全く自館でこれらのことを決めていかねばならない。この点では大学と似ているが，企画性の重要さと地域性の複雑さおよび対象の多様さという点では，大学以上に難しいといえよう。

資料の収集・保存についても同様であり，資料の性状とその取り扱い方に精通していることはもちろん，同定や研究をする能力が十分必要になってくる。特に，或る蒐集家が，その人の生涯をかけたコレクションをどこの博物館に預けようかと考えるとき，勿論，防災や空調・燻蒸などの収蔵設備面も重要ではあるが，それとは比べものにならないくらい大切なのは担当する学芸員の学問的能力と人柄である。その両面を兼ねそなえた学芸員のいる博物館でないと，その人の生涯をかけ，手塩にかけたコレクションなどわたせる気持になれるものではない。また，たとえ，その館の館長にいくら立派な人がいても担当学芸員の人柄か学識かのいずれかに欠点があればやはり，結果は同じである。このうち，学問的な能力を持つためには，学芸員は，常に熱意のある研究者であることが常に要求されるのである。このことは学芸員の最も重要な必要条件であると考えられる。

また，地方の博物館には特に陥りやすい危険がある。それはその地方の「有名人」になってしまうことである。著名な学者・研究者の多い東京や近畿と違い，地方では，マスコミはじめ多くの組織によって，学芸員は，各種の委員への委嘱や，テレビ出演等が多くなり，「名士」にまつりあげられる。学芸員は往々にして，このようなことが繰り返えされると，あたかも自分が，本当の実力以上の専門家であると思ったりする。自分が第一人者であると思いこんだりするのである。いわゆる「天狗」になるのである。これは謙虚さを必要条件とする研究者としての失格，すなわち，学芸員としての堕落の道を辿ることになる。これは，病気のようなものである。この病気は急性でなく慢性の病気なのでタチも悪い。そして，この病いの特効薬はなく，予防する方法は，真摯な研究者に徹することしかない。そして，このためには「サロン的な研究」では意味がない。「血の出るような」研究でなくてはならない。

しかし実際に，学芸員の仕事は多様で多忙である。特に理工系学芸員は展示機器の保守が忙しく，自然史学芸員はその職務の過半数を費やす資料収集保管の大事業がある。このような中で，何をどれ位の比重で行うかが一人一人の学芸員にとって大いに悩むところである。熱意と責任感の旺盛な学芸員ほど，どの事業も思いきり打ちこみたいが時間とエネルギーの限界により，やがて，そのうちのいくつかに手をぬき，さらに，「普及教育はノルマの回数だけこなせばよい」「研究はシンドイからあまりやりたくない」「収集は全て，後々まで整理がついてまわるからからやめよう」などたとえある活動には熱心でも全の活動をおろそかにする学芸員や機能（領域）の細分化した学芸員が出現してしまう。学芸員数が三ケタになろうとする大博物館ならいざ知らず，普通の地方博物館では，やはり一人の学芸員の一つの人格の中でこれらの諸活動が統一されるべきであり，もしバランスを失いかけたら，時には上司や先輩が中告して直すことが必要であろう。細々とでも研究の糸を切らないようにすべきである。

学芸員の研究テーマ選定の基本

以上のようなわけで，私は研究をしない者はも早，真の意味で学芸員と呼べるものではないといえると考えている。それでは，学芸員は何を研究していけばよいのであろうか。博物館学芸員の研究は，大きく分けて「資料の研究」や「地域の研究」など，「専門分野に属する研究」又は「学術的研究」と，いわゆる「博物館学的研究」に分けられる。

私は，このうち，全ての博物館で，少なくとも，何らかの専門や担当をもっている学芸員は，どんなに小さなテーマであってもよいから，自分の担当分野の中から「専門的な学術研究」を行うべきであると考える。博物館学的研究で多大な成果を上げている学芸員でも専門分野での研究が必要である。そうでないと，自分の専門分野もしくは担当分野についての責任の持てるようにはならないと思われるからである。もちろん私は「博物館学的研究」を否定するものではない。それどころか，いやしくも博物館に勤める学芸員で，まじめに（少なくとも自分の勤務する）博物館のあるべき姿やより良い館の諸活動を考える者は全て，博物館学的研究者であるべきであると考えている。実際，いままでの多くの博物館学の成果の中で，現実の博物館活動のまっただ中に身を置き，真剣に悩み，考えている人の研究ほど迫力があり，有用であるものはない。特に瀬戸際で頑張り通した学芸員の研究や意見には感動さえおぼえるのである。したがって，学芸員を「教育担当学芸員」と「研究担当学芸員」に分離しようという考えなどは，余程，人員に余裕のある大型館以外は適当ではないだろうし，「教育担当学芸員」的仕事は，輪番制で行うのが良いと思う。富山市科学文化センターでも例えば「普及教育活動」についてのとりまとめ役を2～3年ずつ，交替で行っているが意識や意欲の面で著しい向上がみられ，新しいアイデアの注入という点からも望ましい状況と思われる。

さて，それでは，「専門分野に関する研究」のテーマはどのように選ばれており，また選ばれるべきなのであろうか。大学や大学院を出たばかりの若い博物館職員は，特に大学院を出た職員では，大学院時代のテーマをそのまま継続するケースが多い。これは，余程，継続が困難な特殊事情でもない限り，また本人の継続意志が強い場合は，無理に変更させるべき性格のものではない。人間には，それぞれの人に応じた目標というものがあるのだから，研究者としての一つの目標を早く到達できるよう，上司や周囲ができるだけ援助（相互援助）すべきであろう。それは当面の目標を達成することが大きなエネルギーとなり，逆にその中断が大きな阻害要因となりうる。それはたとえば「○○地区の地質図を完成させる」とか「○○山のフロラを解明する」とかまたは「博士論文を完成させる」というものであってもよいのではなかろうか。要は目標に向かって真摯な努力をしているか否かである。この努力をする過程で本人は力量を大いにつけ，ひいては館全体の力量をつけることに連なってくる。

しかし，一方では確かに，テーマが，展示や普及教育および収集保管などの他の活動と密着している方が有利である。地質学の場合では例えば，九州の博物館で北海道の地質を研究テーマとして選ぶのは時間的にも経済的には確かに不利である。また昆虫学でいえば大きさが1㎜くらいのトビムシを選ぶよりは，チョウや甲虫を選んだ方が展示などで有利であろう。博物館に入って新たにテーマを決定するときは確かに大切なポイントである。しかし，このようなことは十分理解されやすいことではあるが，そのためであっても，あくまでも強制的なテーマの変更は好ましくはない。具体的な例を二つほどあげてみよう。今，地方博物館の中で，その全ての博物館活動において，指導的役割を果たしている大阪市立自然史博物館の学芸員の当初のテーマは次のようなものであった（日浦1968に追加）。

学芸員A：富山盆地第三系の微化石層序
〃　B：西南日本外帯の地史
〃　C：近畿地方オシダ植物相
〃　D：日本産両生・は虫類の分類地理
〃　E：ハナカメムシ科の分類
〃　F：キジラミ科の系統分類
〃　G：掛川地方新第三系の層序
〃　H：花粉分析学的研究
〃　I：ブナ科植物の系統分類
〃　J：化石象の研究
〃　K：砂粒間隙性多毛類の分類，生態
〃　L：糸魚川－静岡構造線の研究
〃　M：林床植生の構造と動態の研究

この館の例をみても，大学や大学院時代からの継続をしたものが多く，決して広いものではない，しかしこの研究活動がこの館の輝かしい成果をうみだす上で重要なエネルギー源となっている。

また，私の勤務している富山市科学文化センターの学芸員のテーマを列挙すると，

学芸員A　小川岩体の結晶作用の研究
〃　B　来馬層群の地質の研究
〃　C　立山一帯の高山植物の生態学的研究

学芸員 D　富山県内のウラジロガシ林の分布の研究
〃　E　ハナバチ類の生態学的研究
〃　F　等脚目甲殻類の分類学的研究
〃　G　サンショウウオ類の分類学的研究
〃　H　冷却カメラによる天体撮影の研究
〃　I　ハローと人工衛星の摂動の研究
〃　J　変光星の研究
〃　K　天体のえんぺいの研究
〃　L　湿雪の物理学的研究
〃　M　雪のレプリカの研究
〃　N　富山県下の陸水の水質の研究。

この館の研究はまだ端緒についたばかりであるが，殆んどの学芸員が二十代から三十代前半の年齢が若い人達である。勿論，その成果が特別展などで公開されてきているがもっと大切なことは，資料の同定・整理・普及活動など地道な部分での前進が著しいことである。

地方の館の学芸員として要求される知識は幅広いものであり，若い学芸員でも，ベテランと同じことを要求される。少なくも一つの担当分野をまかされている学芸員としては，「若いので知りません」ということは許されない。一人の学芸員の要求される知識や能力の範囲は図1で示したものでとても厖大なものである。これをCとすると，学芸員は狭くとも深い研究(B)と幅広い知識(A)を広げることによって，A×Bを広げCにも対処できよう。また，核となる研究を持っていないと，単なる物知りに終る危険性がある。特に，常設展示を企画する時など，単なる物知りだけでは，魅力ある企画はできないし，新しい魅力的な普及教育もできないであろうし，多くの知識も，学問的裏付けがないと，バラバラなものになってしまう。狭くても，深い専門分野の研究を中核として，多くの経験が有効に一つの人格の中で位置づけられ，学芸員としてめざましい成長を続けていかねばならない。採集旅行の中で，文献調査の中で，学会発表の中で，また，展示企画，普及行事，レファレンスサービスの中にあっても，このような貴重な経験の積み重ねが着実に見られるのである。また，博物館の重要な使命の1つに「新しい文化の創造」が挙げられている。今後，地方の博物館はそれぞれの地方の文化を創造していくセンターとして位置づけられていくべきことは当然であり，自らの研究成果を生み出していくだけでなく，その地方の研究者と協力し，その地方の市民の創造を指導していくためには，自らを第一級の研究者として鍛えあげていくしかないと思われる。そのためにも狭くとも深いテーマが必要である。

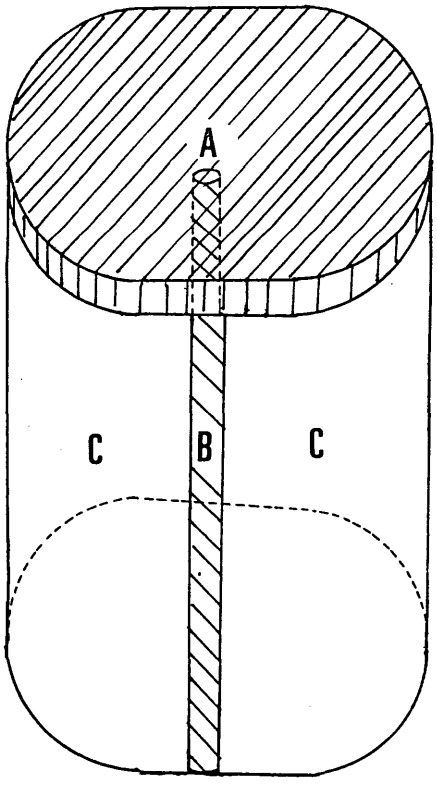

図1　学芸員に要求される知識や能力(C)は広くて深い。これを効果的にカバーするためには，幅広い知識(A)と狭くとも深い研究(B)の両方を追究すべきである。

ところで，近年，大学の研究と博物館研究を区別して，大学が，ものの法則や原理を研究する帰納的研究を行う場所で，博物館は，それらの法則や原理を多くのものにあてはめて研究する演繹的研究を行うべきであるという主張がされてきた。確かに，日本の大学は分類学や地域学的な研究は衰退してしまった。動物学や植物学でも分類学講座が減り，教官の数も減っている。したがって博物館で，そのような研究を行うという方式は，多くの標本を所蔵する博物館が分担するのは良いことであるが，研究の目的が上記のようなことであれば，必ずしも学芸員が大学的研究をしてはいけないことはないと思う。博物館の研究の中から，新しい原理・法則の発見があっていいし，現に第一級の研究が出ている。

しかしながら，いつまでも気のむくままにテーマを全く自由に決めていいというわけではない。やはり，博物館の使命に密着したテーマを自ら見つけ出し，館員となった時点で平行してとりくむべきであり，そのウエイトを次第に増していくべきであろう。

それでは，博物館の使命に沿った研究とは何か，自然史系と理工系に分けて考えてみたい。

自然史系分野学芸員と研究テーマ

自然史系博物館の研究については日浦（1968）の論文が2つの主要方向を示している。その一つは「地方主義」である。地方公立の博物館は地方自治体によって設立されているので，その方が，市民からの「受け」もよくまた「予算」もとりやすいという功利的な考えとは別に本質的な理由がある。

まず，多くの場合，地元の自然がわかっていない。例えば富山の場合も，立山山岳地帯などの学問的に注目される場所に比べて，富山市内のことが意外にもわかっていないのである。富山市に何種の昆虫が生息するのかとか富山平野の池沼の動物相などがかえってわかっていない。博物館を支える市民の足許のことがわかっていないのである。情報社会と言われる現在，全国どこでも見られるものだけを収集し，展示していても，その存在意義はあまり大きくならないのではなかろうか。やはり市民の足許の資料を集め，全国いや全世界で一つかない展示を行えることが，大切であろうと思われる。

また，博物館学芸員は，資料収集保管・調査研究・展示・普及教育の四大事業をこなさなくてはならず，一つの事業にさける労力，時間，予算は限られてくる。一方，展示や普及教育は全国一律のものでは面白いものにはならない。学芸員が自分の足で集めた資料を自分の調査研究によって価値づけしたものが最もホットで独創的な展示や行事であると思う。そうであれば，やはり，地元の資料を集め，研究し，その成果を展示・普及活動で公開・還元するには，いきおい，地元でこれらの活動を進めるしかない。富山のことなら富山の博物館で調べるのが一番有利であることは間違いないので中心テーマとしては地元のものを選んだ方がよい。

しかし，学芸員の調査研究や資料収集等の活動の全てがその地方に限られるべきでないことは当然である。その地方の研究の位置づけがしっかりしたものになるためには，比較のため，他地域を併せて研究することは研究の定石である。また市民の活動範囲や展示その他の館活動に対する要望は，一つの地方に限ったものでなくなっていることも当然である。

もう一点，日浦は，第四紀学のテーマの重視している。地方自然史の研究は，まず，その地方の自然誌の研究と分類の研究を行うことから始まる。これは，軽視してよいことでなく逆に最も重要な必要条件であることは言うまでもない。また近年「生態学的」研究の重要性が叫ばれているが「生態学」の中味はおそろしく多様であり，いちがいには言えないが，ある種の生態学をうまく活用した研究は，大変魅力的なものになると思われる。しかし，この段階でも「現在」を扱っただけの自然誌ではかなり物足りない。やはり，自然史の研究やその成果の普及は，歴史的に行なわれなくてはならない。わたしたちをとりまく自然すなわち地形，地質，岩石鉱物，動物や植物は全て，歴史的に形成されたものである。一方，地元住民は彼（彼女）の地元の自然について，空間的にはかなりの知識をもっているし，また比較的容易に理解を深めうる性質のものと思われる。反面，時間軸が入ると，とたんに理解は難しくなり，知識も乏しくなる。ここに歴史的研究の重要性が存在し，歴史的系列の展示の優位性も存在する。自然史系博物館の研究－展示（及び収集・普及も）はまさに，歴史的方法で行わねばならない。すると，現在の自然や人間生活に最も大きな影響をもつ過去は第四紀ということになる。

さらに，人類が数多くの生命のうち，特別の地位（と責任）をもつ存在になり，自然を多く改変し，また逆に自然から反作用を受けているとすれば，人類紀とよばれる第四紀の研究はこの意味からも最も重視されるべきであろう。これからの本格的自然史博物館は，第四紀学を中核におくべきであろうし，各分野と研究面その他で太いパイプを持つべきであろう。このような分野の研究のホットの成果が展示に出されていると魅力的であろう。

また厳密な意味で第四紀学に入るかどうかわからないが，近年の人間営為による自然の変遷は著しいものがあるが，これも歴史的に展示されるのはすばらしいことである。例えばニーダーザクセン博物館の「Der Bach」（小川）と称する3つのジオラマは1917，1937，1957年の小川のジオラマを3つ並べたものであるが，一見するだけで，風景の変化－生物相の変遷－その裏にある人間営為への重大さが直感できるすばらしい展示であるが，自然史博物館における歴史的展示の優位性がここにもみられる。

なお，当然のことながら，自然史系学芸員は資料を扱い，その分類をすることが基本任務であり，分類学的素養が大切であり，分類学のテーマを一つは持っていることが，特に多人数の博物館でない限り，必要条件の一つである。

また，自然史系学芸員は，莫大な資料の収集を行わねばならず，時には大型コレクションの寄贈があったりして，その労働時間の殆んどを占めることもあり，なかな

か自分の研究時間をとれないことが多い。また，そのくらい熱意のある学芸員でないとその博物館の発展は望めるものではない。大阪市立自然史博物館が今日の指導的地位を築いた要因の一つもそこにあると思われる。ここの学芸員の採集意欲はすさまじく，しばしば寝食を忘れるくらい熱中し，昆虫学芸員の場合，1日に数千頭にのぼる採集をすることもある。これだけの熱意をもった学芸員は他にもそれほど多くないのではなかろうか。また富山市科学文化センターも開館5年にして収蔵資料は13万点を越えた。これらのエネルギーは館を前進させていく大切な原動力であるからこそ，できれば，資料収集活動と調査研究活動が一致もしくは近いことは効率の面からいうと望ましい。その意味からも地元のテーマが望ましいし，できることなら，展示効果のある材料をテーマとしている方が第一義的ではないにしても有利ではあることは間違いない。

理工系分野学芸員と研究テーマ

反面，理工系博物館や理工系分野においては，博物館学的研究は行われていても学術研究の方は自然史系に比べかなり遅れているのではないだろうか。これは理工系分野を構成する物理学・化学・工学・農学・医薬学・分子レベルの生物学などの多くが，とてつもなく大規模な設備と厖大な予算を必要とし，地方公共団体や私立の博物館ではなかなか難しい。また，理論物理学のような分野では，新しい成果を出すためにはかなり恵まれた才能と努力が必要とされるようであるらしい。

しかし，私は，理工系分野であっても，学術研究を行うことが望ましいと思われる。日進月歩の分野であるだけに，専門的研究を怠そかにすると，その成果の吸収さえおぼつかないものになる。また専門の研究者の著作を「勉強」さえすればよいのではないかという考えもあろうが，自然史系であれ，理工系であれ，小さなテーマであっても，真剣に打ちこむテーマを持っていないとなかなか「勉強」を効果的に行うこともできないし，エネルギーもわかない。そして研究成果を正しく吸収するための学芸員としてのセンスがしだいに退化してしまうからである。

富山市科学文化センターでは物理系2名，化学系1名の学芸員がおり，それぞれ「雪」と「水質」をテーマとして学術的研究を行っている。もちろん，物理学なり化学なりの最先端の研究というよりは，地球科学の一分野というべきであろうし，まだ端緒についたばかりであるが，学会発表や研究論文の発表も行われており，なにより，このように研究を進めていく中で，自分自身を成長させ，展示や普及教育などの面で成果があがっていると思われる。特に，本年，理工展示室の企画展示替えを「水と雪」という自分達の研究テーマを窓口としたユニークな展示を計画している。また，「水」や「雪」というテーマは地域や市民生活に密着しているものであり，また，水生生物の生態を研究している生物系の研究との協力体制も見られている。

展示装置の開発・改善や観客の反応の研究など大切で不可欠な研究ももちろん忘れてはいけないが，それらの基礎でありエネルギー源となりうる学術的研究も必要だと思うのである。

また，天文分野は，その扱う対象からみると自然史系に入れられるべきものであるが，物理学系統の出身者が多いことや，多くはプラネタリウムなどの理工的臭いのする機器を備えているせいか，理工系博物館に入っていたり，理工系とみなされていることが多いようである。

天文分野の研究も「第一線」といわれる研究には巨大な望遠鏡やコンピュータ等を必要とされるなど理工系と共通した問題点も多い。特に天文担当学芸員の話によると「プロ」の天文学と「アマチュア」天文学の差は質的に大きくギャップがあり，どちらの道にウエイトを置くか難しいが観測面から両者をつなぐことも不可能ではないという。しかし，富山市科学文化センターにおいても冷却カメラの研究開発をはじめ，変光星の研究，ハローの研究，えんぺいの研究なども行われ，地元の同好会などとの協力で星の和名の調査研究も行われている。この館でのプラネタリウムの投映内容や各種天体観測会も内容がしっかりしていると自負しているが，やはり，最も大切なエネルギーとなっているのは各学芸員が自分のテーマに取り組む意欲をもっていることであろう。なお，地方に根ざしたテーマを見い出すことや，他分野の共同研究という面でも確かに天文分野が最も難しいわけであるが，天文分野は，多くの眼で観測すべき性質も強く，また多くのアマチュアを擁しており，地方博物館でも適当なテーマを見い出すことができる筈である。

学芸員の研究条件と研究環境

学芸員の研究をめぐるさまざまの条件は，しかしながら限らずしも恵まれていない。博物館とともに研究や教育の場である大学と比較しても，わが国の場合は格段の開きがある。したがってせっかくの有能な人材があっても大学に流れてしまう。これは予算や待遇，そして，「雑用」を含め仕事量が多すぎることなどの重要な問題の他，まわりや上が研究活動そのものに理解がないことが多い。

一方，学芸員の仕事は，くり返し述べているように豊かな独創性やアイデアを要求されるものである。学校教育のように指導要領なり教科書なりが決まっているわけでなく，各博物館で，その博物館のおかれた地域性，市民の要求とその館の使命，そこに勤務する学芸員の専門性など，多様な条件の中で何を収集し，研究し，展示や普及すべきかを決めなくてはならない。展示普及にしても学校のカリキュラム作りも自分たちで行わなくてはならない。また，展示にしても普及にしても，その対象は幼児から老人まで，また全くの素人から専門家まで実に多様である。同じ一つの事項でも対象によって何種類もの答え方を工夫しなくてはならない。

以下，特にできるだけ創造的な活動のできることに重点をおきつつ，乏しい経験から研究条件と研究のあり方について意見を述べたい。

まず第一に学芸員の数は最初に問題から外したものの，やはり最大の重要問題である。特にわが国の場合，理工系や自然史系の博物館はその対象のもつ広さと深さのわりに学芸員の数が少ないのではなかろうか。人数は多いことは単に「雑用」を減らし，全体の事業量を増やすことができるだけではなく，この厖大な分野のうち責任をもってカバーできる部分が増え，市民からの要望にこたえられることになる。厳しい財政事情ではあるが，学芸員の数だけは削除とか欠員不補充することなくむしろ増員されるべきであろう。でないと，市民から見放される運命を辿るであろう。

また，学芸員として博物館に勤務していても，その博物館から短期で転勤を命じられるなどの不安があると，どうしても大きなテーマやまとまった仕事を敬遠してしまうし，仕事全体が，おざなりになるのではなかろうか。学芸員と教員とを二～三年で交流している博物館も多いが，このような人事も博物館の発展を阻害し，博物館の特性を理解していない人事といえよう。

次に人的機構であるが，博物館の活動の良否の大きな部分は職員の独創的なアイデアがどれだけでているかにあるのだから，できるだけ，アイデアや独創を出させるように，一見つまらないと思われる意見でも尊重する囲気作りと，全ての職員を意見を聴き，民主的な討議を経て方針を決定していくことが望ましい。もちろん，能率のことも考え，適当な時に館長なり部課長が判断を下すことや，細かなことは各担当に任せることは勿論である。

また職場のさまざまな環境も大切な要因である。例えば学芸員室というべき部屋の構造であるが，個室方式や大部屋方式があり，その併用式やグループ方式などがある。この中で，管理職が側面や背面および前面から管理する形の大部屋方式などは論外であろう。この形だと学芸員は管理職の眼ばかりを気にして思い切った発想ができにくくなると思う。さらに仲間どうしでの相談もでき

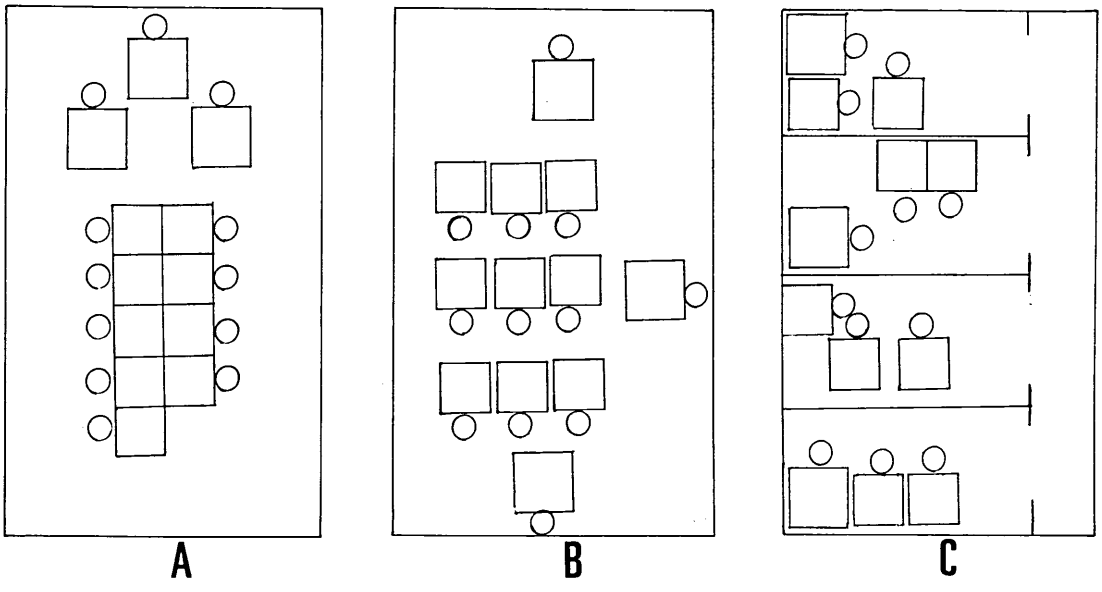

図2　学芸員室の配置例。管理職または監督者3名と学芸員6名の9名の場合。左から大部屋式(A)側面背面管理式(B)グループ方式(C)の例。

にくくなり，博物館の諸活動に不可欠なとりまきたちとの交流ができにくくなると共に，高度な質問をしにきた市民との対応ができにくい。豊かな発想をひきだし，市民との深いつき合いを求め，しっかりした学芸員をそろえている館は個室方式かその変形がよく，チームワークが弱くなる心配のある館は大部屋方式かその変形がよいのではなかろうか。富山市科学文化センターでも以前の大部屋から各セクション毎の仕切りを作って以来，能率の向上とともに市民の方々も学芸員室へ訪れやすくなり，市民とのむすびつきも強化された。

また，学芸員は仕事柄，多くの体験を積まねばならないし，自分の足で歩いた成果を稼がねばならない。他人の成果を見てそれだけで展示や普及するのは何とも心もとない。とくに自然史系学芸員ではこのことがよくあてはまる。特に若い時には勿論，ベテランと言われる域に入った学芸員も，たえず，新しい体験をつけ加えていくことが大切である。なお，地元で，特に自分の担当する地域はよく歩いて，自分の庭のように熟知しておくことが必要であろうし，一方，国内の代表的な自然にも触れておくことが必要であろう。例えば本州中部の館の学芸員でも琉球列島の亜熱帯の自然や亜寒帯に入る北海道の自然なども一応知っておかねば市民を指導し，話し相手にもなれないであろう。また最近は市民の行動半径も広がり，海外へ出かける人も多いので，海外の自然調査の経験の一つもないというのは問題であろう。国内留学・海外留学の道も開かるべきである。

また，学芸員は自らも進んで必要な能力の向上に努め，自己研修を行う必要があろう。例えば英会話などは，海外へ行く場合のみならず，海外からも多くの旅行者，研究者が頻繁に来館するようになってきており，各担当の学芸員が自ら専門的なことを説明しなくてはならない。英会話は最も大切な基本技能になろう。その他，レタリング，タイプライター，コンピュータとワープロ，写真，ＶＴＲなど学芸員が身につけておいた方が有利な技術は数多い。たゞ，数多くの技術のうち，どれを優先して身につけるかが問題である。なお，それ以上に必要なのは学芸員自身の健康の保持と身体の鍛練を続けることである。特に自然史系学芸員にとって山岳での地質調査ができなくなったり，チョウを追いかけられなくなったり，海底に潜ったりできなくなっては大きな後退になってしまう。

以上のような点はかなりの理想であるが，時間の面や能力の面で多くの困難があると思われる。できる限りの無駄を省き，努力をするしかない。

ここで，もう一つの困難がある。それは経済的な問題である。調査研究活動は博物館活動を推進する上に不可欠なものでありながら博物館からの保障はきわめて貧困なことが多い。一つの研究を成し遂げる手順として，まず，文献による調査が必要であるが，日本の博物館にはまだ文献が少ない。大学相互にある複写システムのようなものもない。次に資料の収集や現地の調査が必要となるが，これにかかる旅費はきわめて乏しい。これは大学でも決して豊かではないと思うが，博物館の方が事情は厳しいと思われる。また，学会発表や研究会に出て，研究者仲間に披露し，討論してもらうことが必要であるが，ここでも旅費・参加費が必要である。そして，論文になれば，投稿料，印刷代，別刷代その送料などがかゝる。一つの論文を書くと少なくとも３～１０万円はかかる。普通は，大学教官等と違って，研究費というものもなく，自分のポケットマネーや家計費を削ってこれらの費用にあてざるをえない。研究をすればする程，家計を苦しく圧迫し，大きなジレンマとなっている。わが国の地方博物館学芸員の経済的状況は熱心に研究を志ざす人にとってのこの負担を何とか軽減できるようにしないと学芸員の研究活動は著しく低調なものになってしまうであろう。なお，博物館には，横須賀市博物館や大阪市立自然史博物館等数館を除いて科学研究費の申請する権利はない。このような費用が大規模研究の経済的な基礎となっている以上，多くの博物館への拡大が望まれるし，博物館側でも人的整理や研究機関指定のための設備を充実し，成果をあげることが必要であろう。

× × ×

以上の点はかなり難しい注文であるかもしれない。熱心な研究活動を勤務時間内におさめることもほとんど無理であろう。また学芸員といっても一人の人間であり家庭サービスを怠そかにしてよいということはない。いや家庭さえ円満にできない人間が市民サービスをまともに行うこと自体不可能というものであろう。

私は研究の成果そのものよりも学芸員の姿勢が大切である。研究に対する意欲を失った学芸員は館活動全体に対する意欲も低下しているか空振りに終わっているのではなかろうか。研究に対する意欲を失った学芸員は，早い機会に博物館を去った方が良かろう。自分の研究だけに熱心で，展示・普及・収集・協同研究はやらないという人も早く去るべきであるが・・・。

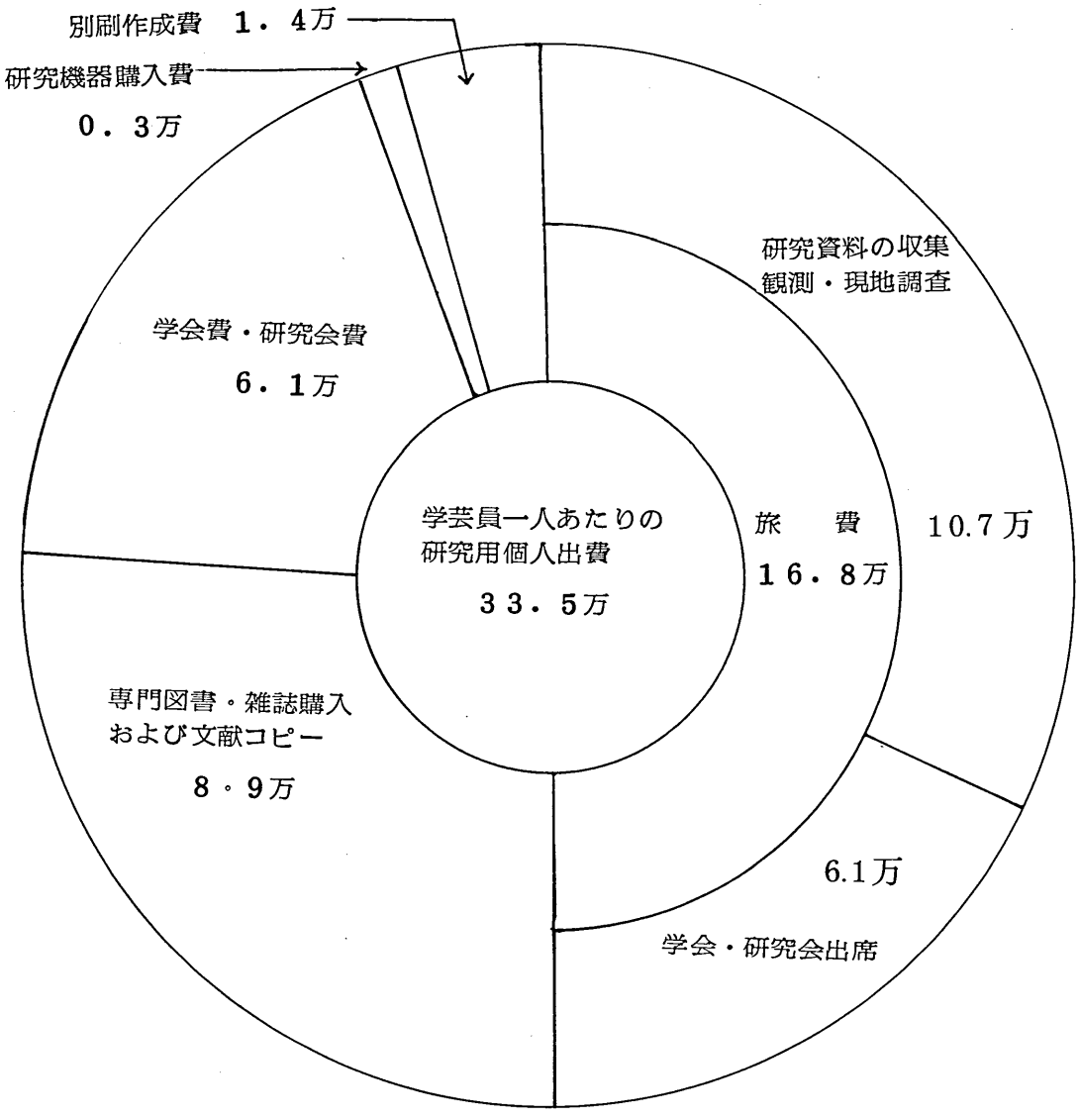

図3　学芸員の年間1人あたり，研究用個人出費の例。昭和57年に富山市科学文化センターの同僚7名を調査した平均。これ以上の活動を望んでいても家計が許さない。

文　　献

千地　万造（1978）博物館における調査・研究博物館学講座第5巻。　雄山閣。
日浦　　勇（1968）研究と展示。大阪市立自然科学博物館館報，2。
日浦　　勇（1980）自然史ノート。博物館研究15（5）。
柴田　敏隆・太田　正道・日浦　　勇（1973）自然史博物館の収集活動。（社）日本博物館協会。
下津谷達男編（1980）博物館の設置と運営。博物館学講座　第9巻。　雄山閣。